アラビヤンナイト

三、アリ・ババと四十人のどろぼう

菊池寛

青空文庫

昔、ペルシヤのある町に、二人の兄弟が住んでいました。兄さんの名をカシムと言ひ、弟の名をアリ・ババと言ひました。お父さんがなくなる時、兄弟二人に、財産ざいさんを半分ずつに分けてくれましたので、二人は、同じような財産を持つておりました。

さて、カシムはお金持のおじょうさんをおよめさんにもらいました。それからアリ・ババは貧びんぼう乏な娘をおかみさんにもらいました。お金持のおじょうさんをもらつたカシムは、毎日ぶらぶら遊んでくらししていましたが、そのはんたいに、アリ・ババは毎日せつせと働かなくてはなりませんでした。毎朝早くから三びきのろばを引いて森へ出かけて、木を切つては、それを町へ持つて歸

って売って、そのお金で、やっとその日その日をくらししてゆくと
いうありさまでした。

ある日のこと、アリ・ババが、いつものように森へ行つて木を
切っていますと、はるか向うの方に、まっ黒い砂けむりが、もう
もうと立っているのが見えました。その砂けむりは、見るまにこ
ちらへ近づいて来ましたが、見れば、それはたくさんの人が馬に
乗って、いそいでかけて来るのでした。

「きつと、どろぼうにちがいない。」アリ・ババはふるえながら、
三びきのろばをかくして、自分はそばの木にのぼりました。そし
て、こわごわ様子ようすを見ていました。

アリ・ババののぼった木の下まで来ると、どろぼうたちは、み

んな馬からとびおりました。くらにつけてあつた袋もおろしました。

そして、そのどろぼうたちのかしららしい男が、木のそばにある岩の上ののぼって行きました。そしていきなり、

「開ひらけ、ごま。」

と、大きな声でさげびました。すると、どうでしょう。その岩が、ぱつと二つにわれました。中には重そうな戸が閉しまっているのが見えました。やがて、その戸は見る見るうちにすうーっと開いてゆきました。そして、どろぼうたちが、その戸の中へどかどかか入って行くと、音もなく戸が閉まってしまいました。

やがてまもなく、どろぼうたちは出て来ました。さっきのかし

らが、また、

「閉まれ、ごま。」

と、さげびました。戸はすうーつと閉まってしまいました。そして岩も、もとの岩になってしまいました。どろぼうたちはどこかへ去ってしまいました。

アリ・ババは木からおりました。そして、さつきどろぼうのかしらと言った、ふしぎな言葉をおぼえていたものですから、岩の上へのぼって、

「開け、ごま。」と、どなってみました。

そうすると、やっぱり岩がわれて、さつきの戸が開きました。アリ・ババは中へ入って行きました。その中は大きなほら穴でし

た。りつぱな宝たからもの物や、金貨きんかや銀貨をつめこんだ大きな袋ふくろが、すみからすみまで、ぎっしりとつみ重ねてありました。これだけのものをあつめるには、まあ何年かかったことだろうと、アリ・ババは思いました。そしておそるおそる、金貨をつめこんだ袋ばかりを六つ取り出しました。そして手早く三びきのろばにつんで、その上に金貨の袋がかくれるほど、切った木をつみ重ねました。それから、

「閉まれ、ごま。」と、大きく言いました。そうすると戸はやっぱり閉まって、岩にはあとかたもなくなりました。

アリ・ババは家へ帰って来ました。おかみさんは金貨の袋を見て、大へん悲かなしそうな、またこわいような顔をして、アリ・ババ

に泣きつきました。

「まあ、お前さん、もしかしたらこれは？……」とまで言つて、それからさきはもう声が出ない様子でした。

するとアリ・ババは落ちつきはらつて、

「安心おしよ。なんで私がどろぼうなんかするものかね。そりや、この袋は、もともとだれかがぬすんだものには、ちがいないがね。」

と、言いました。それから、金貨の袋を見つけたいちぶしじゅうを話して聞かせました。

それを聞いて、貧乏なこのおかみさんは大へんよろこびました。そして、アリ・ババが袋からつかみ出す金貨を、「一枚まい、二枚」

とかぞえはじめました。

そのうちアリ・ババが、ふと気がついたように顔を上げて、

「そんなかぞえ方をするのはばかだね。そんなことをしていたら、みんなかぞえてしまうには何週間かかるかわかりやあしないよ。いつそこは、このまんま、庭へ穴を掘^ほつてうずめようじゃないか。」と、言いました。

するとおかみさんは、

「でも、私たちがどれほどのお金持になったのか、知っておいた方がよござんすよ。」

そう言って、はんたいしました。そして、

「私はこれからカシム兄さんのところへ行つて、ますをかりて来

ましよう。そのますで、私がこの金貨をはかっている間に、お前さんが穴を掘ったらしいじやありませんか。」

と、言いました。そして、おかみさんは、カシムの家へ出かけて行きました。

カシムの家では、ちょうどカシムがるすでした。それでカシムのおかみさんに、

「姉^{ねえ}さん。すみませんが、ますをかしてください。」とたのみました。

「すぐに返しに来るなら、かしてあげてもよござんす。」

カシムのおかみさんは、ぶあいそうな顔をしてこう答えました。そして、どうしてアリ・ババの家でますがいるのか、ふしぎに思

ったものですから、ますの底そこに少しばかりラード（ぶたの油）をぬって、かしてくれました。こうしておけば、このますで何をはかったにしろ、底にくっついて返ってくるにちがいないと考えついたからでした。

アリ・ババのおかみさんは、ますをかりて、大いそぎで帰って来ました。そして金貨をはかってしまうと、また大いそぎで返しに行きました。けれども、ますの底に、一枚の金貨がくっついていたということには、ちつとも気がつきませんでした。

「まあ、なんてことだろう。アリ・ババの家では、あんまりお金がどっさり入ったので、かぞえきれないで、ますではかっただね。」

カシムのおかみさんは、金貨を見つけて、いまいましそうにどなりました。

カシムが帰って来て、この話を聞いて、もつともつとおこりました。そしてすぐに、アリ・ババの家へ出かけて行きました。

「何だってお前はかくすんだね。私の家内かないは、お前がかぞえきれないほどたくさんのお金を手に入れたので、まずではかたつてことを、ちやあんとかぎつけてるんだよ。さあどうして、そんなにたくさんのお金をこしらえたのか、はくじようしろ。」と、アリ・ババにしかるように申しました。

アリ・ババは、せつかくかくしていたことを知られてしまったので、がっかりしました。仕方がないので、兄さんに何もかも話

してしまいました。そして、

「きつと、だれにも言わないでくださいよ。」と、言いながら、あの、「開け、ごま。」「閉まれ、ごま。」という言葉を、教えてしまいました。

カシムは、自分の家へ帰って来て、十二ひきのろばを馬やから引き出しました。そして、それを引いて森の岩をさして出かけました。岩の前まで来た時、ろばをそばの木につないで置いて、

「開け、ごま。」

と、言いました。すぐに岩がわれて、あのふしぎな戸が開きました。

もともとカシムは、大へんなよくばりやでした。それで、どろ

ぼうたちの宝物を見て、とび上るほどよろこびました。そして、金貨の入っている大きい袋をえらんで、それを二十四も、戸のところまで引きずり出して来ました。そして、

「開け、大麦。」と、さけびました。

まあ、どうしたのでしょうか、戸は閉まったままでした。カシムはあわてて、

「開け、あずき。」と、言ってみました。けれども、やっぱり戸は開きませんでした。それからもうますますあわてて、

「開け、小麦。」だの、「開け、あわ。」だのと、おぼえているかぎりの、穀物こくもつの名を言ってみましたけれど、やっぱり、だめでした。戸は一寸も開きませんでした。カシムは「ごま」をすつ

かり忘れていたのです。

ちようどその時、どろぼうたちが馬に乗って帰って来ました。そして、かしらが、

「開け、ごま。」

と、さげんで、ほら穴の中へ入って来ました。そして、カシムと、引きずり出した金貨の袋とを見つけてしまいました。

どろぼうたちは、自分たちの、人にかくしていたお倉くらを見つけられたので、大へん腹を立てました。そして、いきなりカシムをつかまえて、切り殺ころして、からだの肉を切りきざんでしまいました。そして、ここへだれでも金貨をぬすみに来ないように、カシムの肉のきれを一つ一つ、ほら穴の中へつるしました。

カシムのおかみさんは、夜になつてもカシムが帰つて来ないので、大へん心配しました。そして、アリ・ババの家へ行つて、カシムをさがしに行つてくれとたのみました。それでアリ・ババは、あくる朝早く、三びきのろばを引いて、ほら穴さして出かけました。

「開け、ごま。」そう言つてから、アリ・ババは中へ入つて行きました。しかし入るとすぐに、おそれてちぢみ上つてしまいました。兄さんが殺されて、切りきざまれていましたから。アリ・ババは、ふるえながら、兄さんの切りきざまれた肉を、一きれずつていねいによせあつめて、二びきのろばにつみました。そして、あとの一びきは強い小さな黒馬でしたが、これには金貨の袋を二

つつみました。

アリ・ババは町へ帰って来て、まずカシムの家の戸をたたきました。すると、モルジアナという女どれいが出て来ました。この女はカシムの召めしつかい使の中でも、一番りこう者でありました。

アリ・ババはモルジアナを招まねいて、その耳に口をつけて、

「お前のご主人はね、どろぼうに切りきざまれて殺されてしまったのだよ。けれども、だれもまだこのことを知っている人はないのだからね、お前これを、だれにも知らさないですますような工く夫ふうをしておくれ。」

と、たのみました。

それから、アリ・ババは家の中へ入って行って、カシムのおか

みさんに、いつさいの話をして聞かせました。

「けつして、悲しんではいけませんよ。これからは私たちと一しよにくらしみましょう。私たちの宝物も分けてあげましょう。私たちはよく気をつけて、このことを、人にさとられないようにしましょうね。」

と、約束しました。

それから、切りきざまれた、かわいそうなカシムを、ろばからおろして、となり近所の人々には、ゆうべ急病で死んだと言っておきました。

モルジアナは、だいぶはなれた町の、おじいさんのくつ屋をたずねて行きました。そして、針はりと糸とを持って自分と一しよに来

てください、とたのみました。それから、

「お前さんにたのみたい仕事というのは、どうしても人に知られてはならないことだからね、気の毒どくだけれど、お前さんに目かくしをして、その家まで私が手を引いて行くのですよ。」と、言いました。

おじいさんのくつ屋は、はじめはいやだと言いましたけれども、モルジアナが金貨を一枚そつとその手ににぎらせましたら、すぐしようちしました。モルジアナは、このくつ屋をつれて帰って来て、切りきざまれた主人の肉を、ぬいあわせるように言いつけました。くつ屋は、だれだつて、ぬいあわせたとは思えないほど、かつこうよくつぎあわせました。それからモルジアナはまた、く

つ屋に目かくしをして、その店までつれて行きました。

こんなふうにして、カシムが殺されたことは、だれにも知れないですみそうでした。そして、アリ・ババとそのおかみさんとは、カシムの家に引っこして行って、みんなで一しよにくらすことになりました。

けれども、その後どろぼうたちは、あのほら穴へ帰って、カシムの中からだと、金貨の袋がまた二つもなくなっているのに、気がつきました。そして大へんおこりました。

「もう一人、おれたちのお倉を知っているやつがあるんだな、そいつをすぐに見つけなきやならない。」と、さげびました。

そうして、仲間なかまの一人が、どろぼうでないような風をして町へ行つて、あの切りきざんだからだをぬすんで行つた者を、見つけて来ることにしようかと相談がきまりました。

さて、あくる朝、どろぼうの一人が、とても早く町へやつて来ました。その時分じぶんは、カシムの中からだをぬいあわせたおじいさんのくつ屋の店は、もう戸をあけていました。

「お早う、おじいさん。大へん、ごせいが出ますね。ほう、お前さん、こんなに早くから仕事を始めるんですか。ふむ、だが、お前さんの目が、こんなうすあかりで見えるんですかねえ。」
と、どろぼうは、さもなれなれしく声をかけました。すると、くつ屋は、

「どうしてどうして、あつしの目はね、若い者だつてかなやあし
ないんですよ。げんに、たつたきのうのことですがね、あつしや
あ、切りきざんだ人間の死がいをぬいあわせましたよ。それがお
前さん、だれが見たつてぬい目なんかちつともわからないように、
うまくできたんですよ。」と答えたのでした。

どろぼうは、しめたと思いました。そして、

「え？ そりやほんとうですか。そして、そりや、どこの、だ、
だれのです。」

と、聞き返しました。

「それがね、あつしにだつてわからないんです。なぜかつて、あ
つしやあ、目かくしをして、そのの家へつれて行かれて、また同

じようにして、つれて帰ってもらったんですから。」と、くつ屋が言いました。

すると、どろぼうは、金貨を一枚、そつとくつ屋ににぎらせました。そして、その家へつれて行ってくれないかとたのみました。「お前さんにまた目かくしをして、私が手を引いて行ったら、おおよそのけんとうがつくでしょう。もしその家がわかったら、もつとお金をあげますよ。」と、言うのです。

そこで、とうとうくつ屋は、しょうちしました。そして、目かくしをされて、そろそろ歩きながら、カシムの家の前まで来た時、ぴたりととまりました。そして、

「ここにちがいありません。このくらいの遠さだったと思います

。「と、言いました。

そこで、どろぼうはポケットからチヨークを出して、カシムの家の戸に白い目じるしを見つけました。そして大元気で、森の仲間のところへ帰って行きました。

それからまもなく、モルジアナは、このへんな目じるしを見つけてきました。

これはきつと、だんなさまに悪いことをしようとする者が見つけたしるしにちがいない、とモルジアナは思いました。それで、チヨークを取って来て、町じゅうのどの家の戸にも、みんな同じようなしるしをつけて歩きました。

さて、どろぼうたちは、町へ行った仲間から、あの切りきざん

だ人間の家がわかったということを書いて、大へんよろこびました。そしてその晩、戸に白い目じるしのついている家をさして、かたきうちに出かけました。けれども、町までおしかけて来た時、どの家の戸にも同じ目じるしがついているので、どれが目ざす家だか、かいてもくれませんでした。

「ばかめ、これが、りこうな人間のすることかい。お前は、すぐに殺してやるから待っている。」

かしらは、けさ見つけに来たどろぼうを、こう言ってしかりつけました。それから、

「仕方がない、どろぼうの家はおれがさがすことにしよう。」と、言いました。

次の日、かしらは、ふつうの人のような風ふうをして、くつ屋の店へ行って、カシムの家を教えてもらいました。けれども、このかしらはりこう者ですから、チョークでしるしをつけたりなんかはしませんでした。気をつけてカシムの家を見て、しっかりとおぼえこんでおいて、晩のかたきうちの用意をしに、森へ帰りました。

そして、まずはじめに、ろばを二十ぴきと、大きなかめを三十九と持ち出しました。そして、たった一つのかめに、油をなみなみとつぎこんだきりで、ほかのかめには一人ずつどろぼうを入らせました。そして、このかめをろばにのせて、町へ出かけました。そして、カシムの家の前まで来ましたら、アリ・ババはちようど、外へ出て夕涼ゆうすずみをしているところでした。

「今晚は。」

かしらは、ていねいにおじぎをして、

「私は遠^{えんぼう}方からまいった油商人でございですが、今晚だけ、とめていただけませんでしょうか。そして、この油がめをお庭のすみにでもおかせていただけたら、大へんつごうがよいのでございますが。」と、たのみました。

「ああ、よろしいとも。さあお入んなさい、さあ、さあ。」

すぐにアリ・ババは、きげんよくしうちしました。そして門をあけて、ろばを庭の中へ入れさせました。それから召使のモルジアナに、お客さまにごちそうをしてあげるように、と言いつけました。

かしらは、ろばの背中から、かめを庭へおろしながら、中にいる一人々々のどろぼうに、自分が庭へ小石を投げたら、それをあいずに、かめのふたをやぶって、出て来いとつけました。

どろぼうたちは、せまいかめの中で、じっとしんぼうしながら、あいずがあるのを、今か今かと待っていました。

さて、台所では、モルジアナが、夕ごはんのしたくに、てんてこまいをしていました。ところが、そのいそがしいまっさいちゆうに、ランプがふつと消えてしまいました。あいにく家に油がぎれていました。それで、あの庭にあるたくさんのおきなかめから、少しくらいもらったっていいだろう、と思つて、ランプを持つて庭へ出て行きました。そして、一ばん手近のかめのそばまで行き

ました。すると中から、

「もう、出る時じぶん分ですか。」と言う、しやがれた声が聞えました。モルジアナは、びっくりしました。けれども、りこう者のことですから、落ちついた声で、

「まだ、まだ。」

そう言つて、次のかめのそばへ行きました。そのかめの中から、同じようなことをたずねました。モルジアナは次から次と行きました。すると、どのかめからも、どのかめからも同じようなことをたずねました。モルジアナはどれにも同じように、「まだ、まだ。」と言つておきました。そして一番おしまいのかめにだけ、ほんとうの油がなみなみと入っていたのでありました。

「あああ、まあ、なんてふしぎな油商人なんだろう。全く、あきれてしまう。だが、これはきつと、だんなさまを殺すつもりにちがいない。」

モルジアナは、うっかりしては大へんだと思いました。

そこで、すぐに大きなつぼを持って来て、一番おしまいのかめから油をくみ出して、それを火の上にかけました。そして油がにえ立つのを待って、それを、どろぼうたちのかくれているかめの中へ、次々とついで歩きました。それでどろぼうたちは、みんな殺されてしまいました。

こんなにしてしまったものですから、かしらが庭をめがけて小石を投げた時は、どろぼうは一人だって出て来ませんでした。そ

れで、かしらが庭へ出て、かめの中をのぞきますと、どろぼうたちはみんな死んでいたのです。せつかくのかたきうちは、すっかりあべこべになってしまったのです。かしらは、ほうほうのていで、森へにげて帰りました。

あくる朝、モルジアナは、アリ・ババを庭へつれ出して、かめの中をのぞかせました。アリ・ババは人がいるのを見て、とび上げるほどおどろきました。けれども、モルジアナが、手つとり早く、すっかり話をして聞かせましたので、どろぼうは、みんな死んでしまっているのだということがわかりました。

アリ・ババは、こんな大きなさいなんからのがれたことがわかって、大へんよろこびました。そして、モルジアナに、

「ありがとう、ほんとうにありがとう。もうお前はどれいをやめてもいい。お前を自由な身にしてあげよう。また、そのほかにごほうびもあげよう。」と、言いました。

さて、どろぼうのかしらは、手下が一人もいなくなつたので、森のほら穴で、ただ一人、大そうさびしく、また悲しい月日をおくっていました。けれども、アリ・ババへかたきうちをすること
は、前よりももつともつと熱心ねっしんに考えていました。そして、またある一つの方法を考えつきました。そして、さつそく大きな商人むすこのような顔をして、アリ・ババの息子の店のお向いに店を出しました。

この大商人は大そう金持で、そして大そうしんせつでありましたから、アリ・ババの息子は、すぐにこの人をすきになりました。それで、お近づきのしるしとして、お父さんの家の晩ごはんによぶことにしました。しかし、このにせの商人は、アリ・ババの家へ行つた時、アリ・ババに向つて、

「あなたとご一しよにごはんをいただきたいのは山々でございませが、じつは私は、神さまに塩しおを食くべませんと言つてお約やく束そくしているのでございます。それで、家でも、とくべつにいつも塩ぬきのりようりをさせているようなわけでございますから、どうかあしからず。」

と言つて、ごはんをたべることをことわりしました。するとアリ・

ババは、

「まあ、そんなことなら、ぞうさまもないことでございますよ。今晚は、いつさい、塩を入れないように申しつけますから。」と言つて、引きとめました。

モルジアナは、この言いつけを聞いた時、少しへんだなと思ひました。それで、おきゆうじに出た時、お客さまをよく気をつけて見ました。ところが、どうでしょう、そのお客さまはどろぼうのかしらで、しかも、そでの中に短たんとう刀をかくして持っているのがわかりました。モルジアナはおどろいてしまいました。

「ふん、かたきと一しよに、塩をたべないのはふしぎじゃない。」と、モルジアナは心のうちでつぶやきました。ペルシャには、こ

ういう迷^{めい}信^{しん}があるのです。

モルジアナは、すぐに自分のへやへもどつて来て、おどり子の着る着物を着ました。そして、晩ごはんが終つた頃を見はからつて、短刀を片手ににぎつて、お客さまのざしきへおどりをおどりに出ました。

モルジアナは大そうじょうずにおどつて、みんなにかっさいされました。にせの商人は、さいふから金貨を一枚出して、モルジアナのタンボリン（手つづみ）の中へ入れました。その時モルジアナは、片手に持っていた短刀を、やにわに商人の胸^{むね}につきさしました。

「ふとどき者め、お客さまをどうしようというのだ。」

アリ・ババがしかりつけました。するとモルジアナは落ちついて、

「いいえ、私はあなたの命をお助けしたのでございます。これをごらんくださいまし。」

と言つて、商人がそでの中にかくしていた短刀を取り出して見せました。そして、この商人が、ほんとうは何者であつたかということを申しのべました。

それを聞くと、アリ・ババは、ありがた涙なみだにくれて、モルジアナをだきしめました。

「お前はわしの息子のおよめさんになつておくれ、そしてわしの娘になつておくれ、それがわしにできる一番の恩返しだ。」と、

言いました。

さて、それからずいぶん後までも、アリ・ババは、こわがつて、あのふしぎなほら穴へ行ってみようとはしませんでした。しかし、ある年の末、もう一度行ってみました。ところが、どろぼうたちが死んでからは、だれも来ないらしく、中は昔のままでありました。それでもう、こわい者が一人もいなくなつたことがわかりました。

それから後は、「開け、ごま。」と、アリ・ババが、まほうの言葉を唱え^とさえすれば、あのふしぎな戸がすうーつと開いて、穴の中には、持ち出しても、持ち出してもつきることのないほどの、宝がありました。それで、アリ・ババは、国じゆうでならぶ者も

ないほどの、大金持になってしまいました。

青空文庫情報

底本：「アラビヤナイト」主婦之友社

1948（昭和23）年7月10日初版発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。

入力：大久保ゆう

校正：京都大学点訳サークル

2004年11月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

アラビヤナイト

三、アリ・ババと四十人のどろぼう

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 菊池寛

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>